

The Darkness of Karajan

演奏学科弦管打楽器専修 (トランペット) 3年
永井綾

カラヤンは今年で没後20年。去年は生誕100周年ということもあり、近年カラヤンに関する様々な本が出版されている。

カラヤンといえばクラシック界では「帝王」と呼ばれているが、なぜ単なる「王」ではなく「帝王」なのか？それは彼の波乱万丈な下積み時代によるものなのかもしれない。

今回私が紹介する本はカラヤンがベルリンフィルの首席指揮者になるまでの過程をフルトヴェングラーのキャリアや当時の時代背景とともに書き綴られた『カラヤンとフルトヴェングラー』である。

舞台はナチス政権下のドイツ。音楽を敬愛するヒットラーに協力することがドイツ音楽界で生きていくために不可欠な時代だった。当時

●ながいあや 新書の効能持っているだけでちよっぴんインテリに見える…かも。笑

ベルリンフィルで腕をふるっていたのは3代目指揮者のフルトヴェングラーである。彼はヒットラーお気に入りの指揮者であったため「ナチスの音楽家」という印象を持たれていた。ではカラヤンはこの世界で音楽活動をするためにどんなアクションを起こしたのか。

これは私にとって一番インパクトが強かった出来事でもある。それは、カラヤンがナチスに入党したことである。ちなみにカラヤンはオーストリア人で生粋のドイツ人ではない。何よりも驚いたのはその入党理由。

「出世したかったから」ただそれだけ。音楽のためなら世界をも敵に回せてしまうカラヤン。おそろるべし！

終戦後、カラヤンは非ナチ化審理において高ランク犯罪者のレッテルを貼られる。もちろんフルトヴェングラーも犯罪者扱いをされた。しかしカラヤンは妻がユダヤ人のクォーターであることを理由にすぐに音楽活動の再開が許される。音楽のためなら妻をも利用するカラヤン。ずる賢い！

これは物語のごく一部。ほかにもゲシュタポに盗聴、スパイされてしまふという話や音楽マネージャーやナチスの官僚との駆け引きの話は、ちよっぴんインテリに見える…かも。笑

ヒヤツとする。また、第2次世界大戦の音楽事情にも触れている点はとても興味深い。しかし、何よりも印象的なのはカラヤンの美しい音楽を求めるからこそにじみ出る闇の部分である。この本を読んだあとカラヤンの音楽を選ぶ視点や聞く姿勢がぎつと変わるだろう。



請求記号●J110-570
中川右介『カラヤンとフルトヴェングラー』(幻冬舎新書)



演奏学科鍵盤楽器専修 (ピアノ) 3年
鈴木信太郎

皆さんは「ピエール・ブレーズ」という名前を聞いて、指揮者と作

曲家のいずれを思い浮かべるだろうか。殆どの方は指揮者ブレーズを思い浮かべるに違いないし、かくいう僕も始めのうちはそうだった。

ブレーズの名前を初めて知ったのは彼の指揮で録音された、あるCDだった。中学生のころ、なかば「手当たり次第」に近・現代の器楽作品のCDを涉猟していた僕は、ある日、それまで聴く機会がなかったストラヴィンスキーの「バレエ音楽」に手を出してみた。そのCDで、クリーヴランド管を指揮していたのが、ブレーズその人であった。冷静に設計された、透徹した響きの演奏であったが、同時に伝統と深い研究に裏付けられた演奏にも思えた。今でもその時の鮮烈な驚きを感じている。

このCDをきっかけに、僕は現代音楽全般に急激にのめり込んでいった。そうした過程で、優れた作曲家としてのブレーズに出逢うのにそう時間はかからなかったのは当然のこと。様々なジャンルに亘る彼の作品を聴くようになったのだが、今回は、彼が作曲家としてデビューする以前の作品である《ピアノソナタ第1番》を紹介させていただこうと思う。「作曲家」ブレーズの作品として公にした最初のもの、この直後に書かれる《ピアノソナタ第2

番」とカンタータ《水の太陽》であり、ソナタ第一番はいわば「習作」のよくな扱いになるのだろうか。

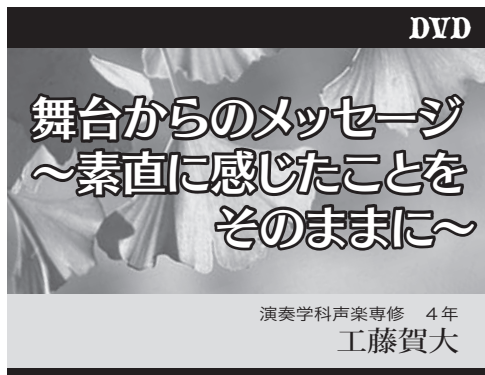
この《第一ソナタ》は2楽章からなり、両楽章とも形式的には、提示、対照、展開、反復といった図式的な、伝統的な観念とはほとんど関係ない連続的な変化、展開の音楽となっている。また音列技法においても、厳格な十二音技法からは離れた独自のものである。

それまで、現代音楽という大量で不協和音を鳴らすイメージが僕にはあった。しかし、この曲にはモティーフの多用や主題労作といった特徴とともに、そのダイナミズムがあくまで「静的」なのである。かのポリニのレパートリーでもある第2ソナタは、「爆発と固定」というブーレーズの作品にとつて重要な要素を含んでおり、この作品も素晴らしいと思う。一方既に述べたように、第1ソナタにはその要素はあまり感じられない。2つのソナタを比較してみると、幾分第1番のほうが内向的に感じる。元々内向的な作品が好きなので、この第1番に惹かれたのか、第2番や他のピアノ作品と聴き比べて、その意外性に惹かれていったのか。今になって考えてみるとそのどちらでもあったように思う。

今もなおこの曲は僕の興味をそつて止まない。是非この機会に皆さんに聴いていただきたいと思う。



請求記号●XD55723
The three piano sonatas /
Boulez. Deutsche
Grammophon, UCCG-1227



「幸せを感じるとき」は人それぞれに異なるだろうが、私はオペラに出かけるときにこそ、それを心底感じる。この原稿を書いている数日前にもミラノ・スカラ座が来日公演

●すずきしんたろう 永野英樹やP.L. エマールのCDもオススメですよ。

を行い(2009年9月)、来年の夏にはトリノ王立歌劇場が初来日。《椿姫》と《ラ・ボエーム》のタイトルロールを人気ソプラノ歌手、ナタリー・ドセイとバルバラ・フリットリがそれぞれ担う。チケット争奪戦も熾烈をきわめるだろう。私自身、今回のミラノ・スカラ座チケット(学生券)発売日には携帯電話のボタンがすり減るくらいアタックしたが売り切れ。無念の涙を流した一人である。

今回紹介する資料はオペラの中でも人気が高く、演奏回数も多いモーツアルトの《フィガロの結婚》。生誕250年を迎えた2006年、モーツアルト・オペラの理想的上演を目指して、視覚や音響面で全面改装した「(新)ハウス・フュア・モーツアルト」のこけら落とし公演となったのがこの《フィガロの結婚》である。

この演出の大きな特徴はやはり天使ケルビムの登場であろう。舞台上の成り行きを全て支配する進役、男女関係に影響を及ぼす存在、そしてケルビノの分身(スピリチュアルな部分として)。序曲の後半くらいから颯爽と邸宅へ現れるが、これから起こることをすでに予見しているようで、見ている側としては複雑な心境になってしまう。

結果としてケルビムは第4幕の幕切れに窓から飛び降りて邸宅内から姿を消す、と同時にケルビノは息絶える。登場人物がそれぞれ元通りになることに納得できなかったのか疑問になるが、見終わった直後《たわけた一日》ではない!と感想を抱いたのはこのオペラで初めてである。

しかし歌い手はいずれも超一流揃いで、そのアンサンブルには舌を巻いた。指揮者ニコラウス・アーノンクールとウィーン・フィルの演奏で、スザンナには人気絶頂のアンナ・ネトレプコ、フィガロには今年来日したイルデブランド・ダルカンジェロ、伯爵には個人的に崇敬しているポー・スコウフス、伯爵夫人には気品たっぷり宗教曲にも精通しているドロテア・レシュマン、ケルビノにドイツリートでも有名なクリステイーネ・シェーファー。

是非一度ご覧になって、率直な感想を聞かせて頂きたい。



請求記号●VE1870
『フィガロの結婚』ユニバーサル
UCBG-1202~3

●くさくさよしひろ この紹介に至るまで、書いては消す...を繰り返したのはひとえにこの作品の濃密な3時間をお伝えしたかった故!